

自分の頭で考える人だけがたどり着ける境地

考えることこそ 教養である

たけなかへいぞう

竹中平蔵

Heizo Takenaka

Thinking:

the best learning method

はじめに——教養とは考える力——

「学者って頭いいよなあ。勉強して何でも覚えているもんなあ」

小泉内閣で大臣を務めていたとき、よく小泉（純一郎）さんと話したあと、そのように冷やかされました。

いつも私はこう返したものです。

「いやいや。絶対に、小泉さんのほうが頭がよくて賢いですよ」

私たち学者は、ともすれば知識だけを積み上げて記憶した“ハードディスク”のよ
うな存在になりがちです。大量の情報が詰まっているけれど、ハードディスクだけで
は何も価値を生み出さない。

必要なのは、CPU（中央処理装置）、つまり考える力です。

CPUが、ハードディスクの中にある情報をひろい上げて計算する。そうしてはじ

めて、「価値」が生み出されます。

情報や知識をどのように使うか、どうつなぎ合わせて活用するか。そうしたCPU的な思考こそが、本当の意味で賢い、つまり価値あることだと思ふのです。

小泉さんには、それがあつた。

私たち学者や周囲の官僚たちのハードディスクをうまく使い、自分なりの考えを絞り出して、政策を決断する。そして、ビジョンを方向づける。サプライズ人事をする。熱のあるワンフレーズを発する……。

その結果、自民党の55年体制という、ずっと変えることができなかった体制を變革して、日本を変える起爆剤となつたのです。

早いもので、あれからもう20年近くの月日が流れました。

そして思ふのは、今こそ小泉さんの本当の意味での賢さが求められているということです。CPU的、アタマの良さです。

なぜか？

今やインターネットが限なく普及し、クラウドコンピューティングも当たり前にな

り、5G回線が世界的に整備されはじめています。

誰しも手にしたスマホによって、世界のあらゆる情報に、どこにいても素早くつながれるようになったわけです。

結果、「知識」の価値は急落しました。

「何でも覚えている」「よく知っている」ことは、強みでも何でもなくなりました。

加えて、世の中は大きな変革のときを迎えています。

先述したインターネットをめぐる環境変化は、その最たるものです。

刻々と進むグローバル化は、あらゆる業界の競争を激化させ、ビジネス環境を大きく変えています。

そしてAIやロボティクス技術の発展は、「これまでの仕事を不要にする」とまで言われています。

これまでの当たり前が、崩れ去り、新しいスタンダードへとアップデートされている。そんな大きな時代の変わり目に、私たちは立っているのです。

だからこそ今、CPU的な賢さ、アタマの良さが必要になっています。

これまでとは違う世界なのだから、過去の蓄積でしかない知識だけでは太刀打ちできません。

いくら過去問をひもといても、正解が載っていない世の中になっているからです。

知識や経験を、どう組み合わせ、どう使うのかが、カギになるわけです。

私は、そんなCPU的なアタマの良さを「教養」と呼びたい。

ひらたく言えば、教養とは「考える力」のことです。

考える力が、いま多くの人に求められているのです。

見渡せば今、私たちの社会には考えるべき課題が従来以上に山積しています。

少子高齢化はとどまることを知らず、労働人口が減り続けています。

グローバル化が進む一方で、日本経済はかつてほどのプレゼンスを發揮できていません。

新型コロナウイルスの感染拡大は、ただでさえ不透明だった社会の未来像を、さらに見えにくくしています。

それは、身近な問題にも直結しています。

「AIが仕事を奪うというけれど、じゃあ、私はどんな仕事をすればいいのか？」

「価値観が多様化している中で、若い部下のモチベーションを上げるのが難しい」

「コロナ禍でビジネスが立ちいかない。上司にアイデアを出せと言われるが、何をどうしたらいいのか……？」

どれも明確な正解はすぐには見つからない、難しい課題です。

今、社会に閉塞感が漂っているのは、**そんな難しい課題が、あちこちに淀みながら散在するからでしょう。**

しかし私はこれらの問題は、あきらめずに考え続けることで、必ずや解決策に近づくことができると思います。モヤモヤとした閉塞感を打ち破れるはずですよ。

ただ、それには少しコツがあります。

考えるには、それなりのツボがあります。

私はそのツボを探りながら、これまでさまざまな課題に取り組んできました。今は若い人たちにそのツボを探そう、と伝えていきます。

これからの社会を担う多くの若い人たちに、目の前の課題解決のきっかけにしてほしい。先の見えないモヤの中を歩んでいる皆さんの羅針盤にしてほしい。そう願って、本書を書きました。

「でもいつたい、どうやって考えればいいのか？　そもそもツボってなんだ？」

疑問を抱いたときが、考える力をたくわえるスタートラインです。

竹中平蔵

第1章

考えるとは「マイ・ストーリー」を描くこと

自分の頭で考える「マイ・ストーリー」	017
ニュースを「読む」だけでは意味がない	021
教育の「促成栽培」を続けてきた末路	025
世の中の問題は解けないものばかり	029
「考えない人間」を生み出す仕組み	032
ハーバード大学に申し出を断られた	035
小泉元首相が安倍次期首相に伝えたこと	039
これからはコンピタントが重要	041

私よりもずっと教養があった親の姿……………045
考える人だけに見える景色がある……………047

第2章

考えることで身につく能力

- 能力① 応用力が身につく……………053
——腑に落ちるまで考えることで他にも応用できる
- 能力② 決断力が身につく……………060
——常に考えているから答えがすぐに出る
- 能力③ 発見力が身につく……………063
——他人の考えをテイクアウトして学ぶ
- 能力④ ふところが深くなる……………066

—— 考えを交流させることで多様化する

能力⑤ アップデートする力が身につく

—— 次の一手を考え続けるから常に革新的

能力⑥ 真偽を見極める力が身につく

—— 現場で考えることで見えてくる

能力⑦ 志が育まれる

—— 前向きに考えるエンジンが育つ

第3章

考える「型」をつくる

型① 川を上る

問題の本質、本当の狙いを遡って考える

型② 海を渡る 101

問題の所在や解決法を、他国や他の地域と比べて考える

型③ バルコニーを駆け上がる 106

一見、気がつかない問題を、視座を上げて考える

型④ 場所を変えて考える 109

脱マンネリ！環境を変え、気分を変えて考える

型⑤ 体験してから考える 112

百聞は一見に如かず！現場に足を運んで考える

型⑥ 書きながら、話しながら考える 115

アイデアが膨らむ！つぶやきながら考える

型⑦ 基礎を学んでから考える 119

考える土台をつくってから、考える

第4章

考える！実践問題

- 問題① なぜ、牛乳パックは四角いのか？……………127
- 問題② なぜ、日本はDXで遅れをとっているのか？……………134
- 問題③ 日本でLGBTの認知が広まらないのはなぜか？……………141
- 問題④ クルマの給油口は、なぜ左か右に統一されないのか？……………149
- 問題⑤ 対立するアメリカと中国。日本はどちらにつくべきか？……………155
- 問題⑥ アメリカの株価が上がると、なぜ日本の株価も上がるのか？……………166
- 問題⑦ 東京オリンピック・パラリンピックは開催すべきか、中止すべきか？……………172

第5章

考えることをあきらめない

考える習慣 ① アウエイで勝負する 182

考える習慣 ② フェイクニュースに惑わされない 186

考える習慣 ③ 対案を出す 190

考える習慣 ④ 常にユーモアを！ 195

考える習慣 ⑤ 視線を未来に向ける 198

おわりに 202